



## 突然の朝

---

### 登場人物紹介

笹井米・・・王立Midiansの学園女子寮長。食べ物に目がなく、ちょっと騒々しい女の娘。  
ぐりこ・・・米が拾ってきたメス犬。魔力を使うことが可能で、人間にも化けられる。

早朝、女子寮の人部屋で、ぐりこは眠い目を擦りながら目覚めた。  
それは飼い主の米が身支度をしていたからである。朝型の彼女のことだから、珍しいことではないのだが、いつもと何か様子が違うのだ。犬族である彼女は長年、一緒に暮らす飼い主の異変に気がついたのだった。キャリーケースに荷物を詰め込んだ米が、ぐりこを起こしてしまったことに気がついて話しかけた。

「ねえ。ぐりこ。私、今日からしばらく出かけるから」

しかし、目を合わせようとせず、すぐに部屋から出て行った。  
寝起きで頭が回らないぐりこには、何が起きたのか分からない。ただ黙って立ち尽くすばかりである。いつもと変わらない二人の部屋。ただ部屋の主がいない。それだけで何か違って感じる。見回すとあまり、景色が変わっていないことに気がついた。どうやら、そんなに荷物を持って出かけたわけではないようである。一人、取り残されてベッドの上に座って見る。まだ、ご主人さまの温もりが残っている。ただそれも次第に冷たくなっていく予感が感じられた。その時である、ふと、ぐりこにある考えが過った。もしかしたら、敢えて持ち物を部屋に置いていったのではないかと。そう敢えて。

そのことを考えると、何か取り残された様な気がしてきた。すると、いてもたってもいられず飼い主の後を追いかけていた。まだ早い時間なので誰も校内を歩いてはいない。だが米の姿はどこにもない。もう校内にはいないようだ。学園を出て何処へと向かったのだろうか。ぐりこは、そんなことを考えながら坂を下って、学校からどんどん遠ざかる。丘の上に立つ校舎をふと振り返ってみた。行くとしたら何処に行くつもりなのだろう。朝早くに起きたばかりで、よく考えが及ばなかったのだが、米が遠くに行くと言ったことが反芻した。もしかしたら、どこか遠くに行ってしまうのではないか。朝の様子を思い出すたびに、彼女がどこか儂げだったことが浮かんでくる。そのことが、ぐりこに急な胸騒ぎを覚えさせた。もし、自分の知らない遠くに行ってしまうのなら、おそらく・・・。

その考えが頭を過った瞬間に駆け出していた。米が駅にいると確信したからである。とにかく

く走った。犬族なのだが、今はそんなことを言ってる余裕はなかった。街のやや外れに位置する駅まではまだまだ遠い。息がきれてくる。それでも、どうにか走るペースを落とさずにもってく  
いれと思った。胸が締め付けられる思いだった。肩で息をしても、走るのを止めてはいけない気がした。駅のシルエットが近付いてきた。入場券で改札を通る。ホームに姿はない。とっさに逆のホームへの階段を駆け上がった。もう体力が残っていない状態だが心は無心だった。そして、  
やった米の姿を見つけることが出来た。

「米さん。待って下さい」

その呼びかけに、一瞬ビクっとして米が振り向いた。  
列車がそこに到着するという合図が響き渡った瞬間だった。

「ぐりこ。どうして追いかけてきたの？」

そう言う米は、少し涙声だった。

「だって、米さんが消えてしまう気がして、私……………」

そこから体力の限界もあって何も言えなくなった。

列車はホームに、ゆっくりと入って来ていた。

「ねえ。ぐりこ。元気でいてね。ごめん」

心臓が凍りつくかと思った瞬間だった。何のことだか分からない。今日は何から何まで飼い主の  
ことを理解できないと思った。余りにも唐突な一言に、呆然となる。

「私、待ってますから。米さん？」

米が列車に乗り込んだその時、列車の扉が閉まりかけた。それでふいに目が覚めた。

「米さん！！！！」

ぐりこは、当たりの視線に構わず叫んだ。

扉は無情にも閉まった。

## 二人の運命

---

駅のホームで立ち尽くす。列車は見る見る遠ざかっていくのが分かった。どうにもならなかった。ホームには自分以外、誰もいない。反対側のホームにも人は、まばらである。昨日までの日々は何だったのかと、思ってしまった。今日と昨日。そこには大きな断絶があるように思えた。時間に見れば、数十時間もしないはずなのに、何もかもが、決定的に変わってしまったような気がした。悲しみというものは、消えていた。ただ心に大きな穴が空いたようだった。考える力が湧いてこない。体力は、とうに戻っていた。だが、喉が枯れ果てていた。とぼとぼと改札へと向かって歩いていく。入場券を握る手に力が入らない。よく分からない内に改札を出ると、思わず座り込んでしまった。視線は定まっていなかった。

その日の夕方にもなると、女子寮は大騒ぎになった。なぜなら寮長の米の姿が学園から消えたからである。やがて、ぐりこもいないことで騒ぎはエスカレートした。二人の姿が忽然と消えた。女子生徒たちが集まって来た。そして、朝型に米が出ていく姿を偶然にも目にしたという生徒が現れた。その生徒が言うには、キャリーケースを持って出ていったらしいのだ。そこから、色々と話が始まった。しかし、誰もそれから先のことを知る者はいなかった。学園は夏季休暇中であり、秋が近付いているとはいえ、何の連絡もなしに寮長が姿を消したことで動揺していた。夏季休暇中に、家に帰っている生徒もいるのだが米は、そんなことを一言も告げていなかった。混乱のうちに一夜が過ぎていった。

事態が動き出したのは、二日目だった。街に買い物に出かけた生徒が駅で、ぐりこに遭遇したというのだ。

「ねえ？あなた、米さんの飼い犬の、ぐりこさんじゃない。どうしてこんなところに？米、寮長はどうしたの？」

その瞬間、ぐりこは泣きだしてしまった。ぐりこが落ち着いてから聞いて見ると、何も分からないと言う。

「私は、米さんが帰ってくるまで駅で待ちます。ずっと待ちます。だから寮に戻ってください。私は大丈夫ですから……」

そう言ったきり、動こうとはしなかった。

それが駅から戻って来た女子生徒の証言だった。これを受けて動揺が広がり、男子寮まで波及した。米と幼馴染の夜上寮長にまで話が届いたのだが、彼も行き先を知らなかった。

米は、席に腰を落とした。列車はターミナル駅へと向かっていた。ターミナルに着いたら、西へ向かうか東へ行こうかということ考えた。それは自分の住んだ土地へ行くか、地縁も知り合いもない見知らぬ土地へ行くのかという選択でもあった。どちらを選ぶべきなのか自分でも

分からない。ただ遠くへ行こうとだけ考えていた。やがてターミナルへと着く。学園がある街からは、そう遠くないのだが、やはり市の中心地だけあって大きくて広い。米はこの時、ターミナル駅から多くの人たちが出ていくことと、新たにこの地を踏むことを思い知った。今までなら、交通の乗り換え地点でしかなかった場所が、自分の中で急に意識されだした。そしておもむろに、駅のチケット売り場へと向かった。そこでチケットを購入する。そして、乗り換え口へと向かう。米はホームに立った。列車が来るまで時間は、少しだけある。改めて、ホームからの景色を眺めた。大勢の人々が行き来している。奥のホームでは、仲良さそうな恋人と思われる二人が、別れのやり取りをしていたし、駅のベンチで空を眺めながら缶コーヒーを飲んでいる者もいる。それぞれにドラマがあるように思えた。今まで他人に思えた人々が、こうして自分と同じ駅という場所に集っている。高速列車がホームに滑り込んできた。人々がベンチを立って、乗り降りの場所へと向かう。太陽は昇っているが、まだ暑さはそれほどでもない。自分が朝早くに出てきたことを思い出した。そして米は列車へと乗り込んだ。その時、新たな希望と去ることの寂しさ、そして不安がよぎった。それでも彼女の未来は開けていた。道は決まっていたのだ。誰も自分を知らない街へ行こう。進路は東だった。

それから夜が来て朝が来て、またそれを何度も繰り返した。

駅の改札には、小汚くなった一匹の犬が身をかがめていた。  
それを見た瞬間、米は言葉を失って立ち尽くした。それは少し汚れて、元気がない様子であっ

たが、自分がよく知る人物だったのだ。ぐりこは、米にすり寄ってきた。

「米さんが帰ってくるまで待ってるって言いましたよね？ずっと待ってたわん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

米は声を失った。

「私の寂しさより、もっと米さんは寂しかったよね？だから心配しないで下さい。魔力を貯えていたし平気です。お腹、減ってないですか？」

そういう、ぐりこの体は、7日間という時間を駅の隅っこで過ごしたことを物語っていた。次の瞬間には、米は、ぐりこに抱きついたまま身を、うずくませた。米から嗚咽がもれる。

ぐりこは自分の体毛に飼い主の体温を感じるのと同時に温かいが、湿ったものが毛を濡らすのを感じていた。それが7日目にして再会した飼い主と愛犬の姿だった。

しかし、ぐりこには、この一週間という時間が1年にも2年にも、あるいはもっと長く感じられたのだった。

「ぐり。こっちにおいで。綺麗に洗ってあげるからね！」

「わん！ 米さーん！」

「ぐり—————！！」

女子寮の浴場の方から大きな声がする。

Midians学園には、個室のバスルームと大浴場が男女の寮に設けられているのだ。その手前に位置する、女子寮食堂には生徒たち数名が集まっていた。

「寮長、戻って来たんですね。私、3日目にはこれからどうなるのかと思っちゃいました。先輩は心配じゃなかったんですか？」

そう聞かれ、長髪の少女が、手帳に予定を書き込んでいた手を止め顔を上げた。

「私は、心配なんてしてなかったよ。前にも似たようなことあったし。でも、全く世話がやけるとは思ったけどね」

「うわぁ。流石ですね。先輩は」

後輩にそう言われ、Midians学園3年生の翼乃稔梨は軽くほほ笑んだ。

「でも寮長が戻ってくると、騒がしいですよ。またハーレム！とか言いだすんでしょうか？浴場まで行ってちょっと静かにするように先輩、言って来てもらえますか？私、宿題に集中できなくて」

「いいじゃない。今日くらい。あなただって今まで少し寂しかったでしょ？そっとしておこうよ」

そう稔梨が言うと何も言わず微笑みかえした。

浴場では、まだ二人が嫁とか旦那とかお互いを呼び合い、騒ぐ声が続いていた。

こうしてMidians学園女子寮の夜は更けていくのであった。

## 小さな旅行のメロディ

---

### 登場人物紹介

#### 笹井米

王立Midiansの学園女子寮長。食べ物に目がなく、ちょっと騒々しい女の娘。  
米と書いてマイと読む。

#### ぐりこ

米が拾ってきたメス犬。魔力を使うことが可能で、人間にも化けられる。  
毛並みと体毛の美しさが自慢。

#### あらすじ

今日は、学園がお休み。米とぐりこの二人は前々から楽しみにしていた  
テーマパークに出かけることになっていた。飼い主と愛犬のほのぼの  
休日記。

朝からMidians女子寮の一角だけが騒がしい。鍵の閉まる音がして、一人の黒髪の少女と金と茶が混じったきれいな体毛の飼い犬が部屋からあらわれた。

「忘れものないよね？　ぐりこ」

「はい。大丈夫です」

「じゃあ。行ってきますの……お手して」

「わん」

「ぐりこー」

「米さん！」

出かける前から盛り上がっていると

「朝っぱらから、あんたたち仲がいいわね」

廊下で騒いでいた女子寮長と飼い犬に部屋の扉を開けて、声をかけて咎めたものがある。

「あ。稔梨ちゃん。おはよう」

「おはよう。こっちまで声がもれてるから、もう少し静かにして。そしてまだ早いから私は寝るから。じゃあ、おやすみ」

おはようで始まって、おやすみで挨拶を終えると、そのまま稔梨は部屋に引っ込んだ。扉がぱたんと閉まる。

「もう。ぐりこ静かにしなきゃダメじゃない。みんな土曜の休日だから、まだ寝てるんだよ」

「すいません。でも、米さんも、はしゃいでましたよ」

「うぐう。と、とにかく寮を出るまでは静かに」

一転して、忍び込んだ泥棒のように抜き足差し足で食堂を通り過ぎる。そして、廊下に出ると角を曲って玄関へとたどり着いた。靴を履き替えると米が言った。

「さあ。今日は電車だから、変化するんだよ」

その囁くような声に促されて、ぐりこの姿が飼い犬から人間の姿へと変わった。

「はい。靴」

米は『ぐりこ』と書かれた下駄箱から靴を出して揃えてあげる。ゆっくり履く姿を眺めている飼い主の顔が嬉しそうだ。

揃って、円柱に支えられた女子寮の玄関を出ると陽光がきらきらしているのが分かる。空は既にあけているが、まだ陽は高くはない。

「は一。息がつまるかと思った。もう大丈夫。そうだ、ちゃんとチケットは持ってきた？」

人型になったぐりこに米が預かっていたキャラクターの形をしたリュックを渡すと、ごそごそしはじめた。

「二枚分、ちゃんと有りますよ」

ぐりこが、すかさずオーシャンランドの入場券を突き出す。正確には犬なのだが、ペット入園禁止なため、学生二名と表記されていた。

「さ、今日は海賊王になるよ」

「米さん、私たち女子ですよ」

ぐりこの言葉をうけて、しばし沈黙した後

「じゃあ、海賊王女になる！」

元気よく米は、バスケットを天高く付きあげて宣言した。輝く太陽を背にして彼女は妙に勇ましかった。

(続く)

学園に続く坂を下り終えた米は時間を確認した。どうやら問題ないらしい。

坂の下にある停留所に書かれてある時刻表と時計の針を比べてみると、まだ時間に余裕がある。バスが遅れることもあるので、乗り過ごす心配はこれでなくなった。そう思っているうちにバスが道路の奥から、ひょっこり顔を見せた。ちゃんと行先はターミナル駅とある。二人は仲良く手を繋いで乗り込んだ。

まだ、朝の八時にもならない車内は人がまばらである。席のあちこちが空いていた。お婆さんと、土曜なのだがスーツを着た会社員と思われる男性と、親子連れしか乗っていなかった。

途中、病院の前でお婆さんが降りただけで、バスは他の乗客を拾うことなくスムーズにターミナル駅に着いた。

バスの停留所の近くには地下へと続く階段がある。そこから地下道を通ればすぐに、駅へとたどり着く。休日切符を買うとそのまま改札を抜ける。広い駅の中は人でいっぱいだ。これが、太陽の高さと並行して時間とともに、どんどん増えていく。

「わぁ。お弁当があるよ。ぐりこ、ほら見て見て」

米が足を止めて、おこわが湯気をあげてる駅構内の売店の一角を指差した。

「米さん、無駄遣いは止めるっていったじゃないですか」

諭すような口調で、ぐりこが言ったのも関わらず

「うう。分かってるよ。大丈夫、目で味わうだけだから」

そう言って、ぐりこの視線を浴びているとは知らずにひよこひよこ売り場に近づいていった。

しばらくして戻ってくると

「試食させてもらっちゃったよ。山菜おこわ美味しいなあ」

米は、食後の感想をまじえた満足そうな笑顔を浮かべていた。

「それより米さん、電車の時間」

そのひと言で、今日本来の目的を思い出し

「そうだよ。つい人間界の食べ物の美味しさに気を取られるところだった！」

駅構内の電光掲示板を見上げると、すぐに4番線乗り場へと、揃って足早に向かうのだった。

階段を駆け降りると、すでにオーシャンライナー号はホームに到着しており、大半の乗客は席に腰をおろしている。

発車時刻まで一分あまり。

まだ空きのある二人掛けの席を探して米とぐりこも腰掛けた。車内はバスとは比べ物にならないほど大勢の人がいた。それぞれの格好から、目的地はオーシャンランドというのが伝わってくる。

二人はかなりの時間、電車に揺られていた。特急を降りる人はあまりいなかった。米たちの県を超えて車窓は、高いビルやのどかな住宅街を次から次へと通過する。車内では、子供のはしゃぐ声と親が静かにと注意する声が何度も聞こえた。景色を見ては、幼い声でしきりに、はしゃい

でいる。

きゅうううううう

そのとき、何やら音が響いた。

真っ赤な顔をして、視線を落としているぐりこを米が見る。出所は隣の席だった。

「もしかしてもう、お腹がすいちゃったの？」

「・・・・・・・・はい」

恥ずかしそうな顔をして、おずおずとぐりこが答えた。実はオーシャンランドで食べられるものを楽しみにしていて、ぐりこは昨日の夕食も軽めに抑えていた。

「ぐりこは、おこわも試食してないもんね。食べていいよ」

米は持ってきたバスケットを差し出した。

「電車の中だし、一人で食べるのも・・・・・・・・」

そう言うと、ぐりこは口ごもる。

「気にしなくてもいいんだよ。量はあまりないけど、お腹すいてるんでしょ？」

空腹のせいか、ちょっと元気がないように見える、ぐりこを米が覗き込む。

「そうだ。海浜海岸駅で降りて食べましょう。あそこなら、区間快速急行も出てますし」

気遣ってもらったぐりこは、代替案を出してみた。

「米はいいけど、ぐりこ、無理しなくてもいいんだよ」

「大丈夫です」

「じゃあ決まりね」

途中で腹ごしらえすることが、今日のスケジュールに書き加えられた瞬間であった。

はるか先、奥の方に大きな橋が見える。瀬戸海大橋だ。それを眺めながら、ベンチに米とぐりこは座っていた。目的地まで、三分の一をきったあたりで、少し早いランチを取ることにしたのだ。

「タマゴサンドとカツサンドとハムサンド。どれがいい？」

見ればバスケットに、きっちりとサンドイッチが詰まっている。早起きして、米が準備していたものだ。

「ハムサンドがいいです」

「はい」

バスケットから、ぐりこ御希望のハムサンドを取り出すと手渡した。ぐりこを、それをむしゃむしゃ食べている。米も自分の分のタマゴサンドを頬張る。

目の前には海が広がっていた。海浜海岸駅はビーチが近い。波の音がして、太陽が海面を照らして金色に輝いているのがベンチからも見える。空には白い雲が、浮かんでいて風が磯の香りまで運んでくる。

それを見つめながら二人で食事を楽しんでいた。この景色をゆっくり見られただけでも、この途中下車は成功だったかもしれない。仲良くサンドイッチを二枚ずつ食べ終えたところで、区間快速急行がやってきた。

(続く)